# My Sweet Beast

天音由羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｍｙ Ｓｗｅｅｔ Ｂｅａｓｔ

【Ｎコード】
Ｎ７１７４Ｚ

【作者名】
天音由羽

【あらすじ】
新解釈 「美女と野獣」です。

実父と継母、そして二人の義姉妹と暮らしていたリリー。
ある日街へ仕事に行った父の帰りが遅いことを心配し、街を出ようとする。
その時、一通の手紙が。
「父親の命は預かっている。無事に返して欲しければ娘を寄越せ」

リリーは父を助けるため、単身野獣の城に乗り込むのだが…。

紳士で上品な心優しき野獣と、明るく気立てのいいリリーの恋物語。
ほのぼのハッピーエンド予定です。

# Vol.1　出逢い

## My Sweet Beast

鬱蒼と生い茂る森の中。
一筋の光も差し込まず、足元は常にじめじめとした湿気でぬかるんでいる。
頭上には青黒い葉が覆いかぶさってきて、木々の蔦が蜘蛛の巣のように絡み合っている。
フクロウの低い鳴き声が絶えず響き渡り、時折野生の狼と思われる唸り声が微かに聞こえる。
葉擦れの音はなにやら幽霊の囁き声のように聞こえて、ゾクリと身震いしてしまう。
どうして私が。
なんてことは分かってる。
何より大切な父は、私の母を亡くしてからしばらくして、どこで見つけてきたのかド派手な極楽鳥みたいな継母と再婚した。
継母にはこれまた似たような装飾に身を包んだ、九官鳥（つまりおしゃべりで頭が軽いってこと。っていうと九官鳥に失礼ね）みたいな二人の娘がいて。
私には一度に面倒臭い家族が増えた。

その三人は大きな街まで仕事の交渉に出向いた父にたんまりお土産をねだり、家では私を召使替わりに顎でこき使い、好き勝手に過ごしていた。
あれだけねだられれば値段も相当なはずだ。
父は私にも土産に何が欲しいか聞いてくれたけど、お土産なんていらなかった。
「お父さんが無事に帰ってきてくれればいいわ」
そう言ってこれ以上継母たちが父に何かをねだる前に、さっさと出かけるよう促した。
その父が帰宅予定より一週間を過ぎても戻らない。
何の連絡もないまま帰ってこないなんておかしい。
どうしてこんなに帰りが遅いのか、手がかりを求めて街から帰り付いた人たちに手当たりしだい聞いて回ったけれど、結局何も分からなかった。
こうなったらしょうがない。
生まれた頃から一緒に暮らしている愛馬にまたがって、自ら父を探しに行こうと街を出ようとしたのだけれど。
出かけようとしていた私を見つけて、慌てた郵便屋さんが呼び止めてくれた。
そして一通の差出人のない手紙を受け取る。
開いてみれば、そこに書かれていたのは

「父親の命は預かっている。無事に返して欲しければ娘を寄越せ」

いかにも悪党な文章でそんなことが書かれていた。
継母たちの反応は推して知るべし。
「お母様！！とっても怖いわぁ！」
「どうしちゃったのかしらお父様！！何をやらかしたの！？」
「まったく困ったものねぇ。大丈夫よ、私の可愛い娘たち。リリー、あなたが行ってらっしゃいな」

「…」
こうも分かりやすいといっそ清々しい。
無論あなたたちに言われなくても行くつもりでした。
と、喉まででかかった言葉を無理やり飲み込んで、私は結局また愛馬にまたがって街を出ることにした。
最初に手紙を読んだ時には書かれていなかったはずの地図が、森に入った頃突然浮かび上がったのにはビックリだ。
どこへいくにせよ、この森を抜けなければいけなかったから、とりあえず進もうとした矢先のことだったのだけれど、どうも解せない。
地図によれば森には幾筋か道があるらしいのだ。
素直に従っていくと、確かにあった。
一度も通ったことのない…というか、今まで見たこともない道だったけど。
こんなところに道なんてあったのね。
なんて呑気に思えたのは最初だけだった。
地図通りに一歩踏み出すと、急に愛馬が怯え出してそれ以上先へ進めなくなってしまったのだ。
仕方なし馬を降りて、自宅へ戻るように押し返してやり、私は一人歩き出したというわけ。
動物の本能って素晴らしい。
あの子にはこの森がどんな場所なのか、察することができたんだから。
こんな不気味なところだって分かってたら、私だってもっと準備万端にして旅立ったのに。
後悔してももう遅い。
頼りにできるのは手元にある地図一枚だけ。
それならば、あとはここを一刻も早く抜け出さなければ。
ぬかるむ地面をしっかり踏みしめ、足早に歩く。
いろんな声や音が聞こえるけれどそれら全てを聞こえないふりし

て通り抜けていく。
服が無数の細い枝に引っかかり、どうしても数カ所破けてしまったけれど、そんなこと気にしていられない。
最後は走る勢いで森を駆け抜けた。

暗くて深い森は、急にぱっと開けた。
顔を上げるとそこには聳えるように建てられた大きな門。
延々続いている白い外壁には様々な模様が複雑に彫刻されている。
おどろおどろしい悪魔が掘られているのは、ここの主の趣味なのだろうか。
なんて趣味の悪い。
思わず顔を顰めてから、おそらくこの向こうに父がいるのだと、覚悟して鉄の扉を押し開けた。
これまた不気味さを煽る鉄同士の擦れるギィという音が辺にこだまする。
「失礼します…」
一応声をかけてみる。
微かに聞こえる小さな足音。
…何人かいるらしい。
でも人の足音とは何かが違う。
そう思っていたら、小さな幾つかの影が目の前に躍り出た。
え。
「お待ち申し上げておりました。さあ、どうぞ」
丁寧に奥を指し示されて、恭しくお辞儀される。
に、人形？

目の前で喋ったのは男の子のビスクドールだ。
傍らには女の子のビスクドール。
なぜ？
私、もしかして夢を見てる？
森の中が怖すぎて気絶したのかしら？
ぎゅっと頬をつねってみれば
「痛い」
ってことはこれは現実なんだわ。
現実なのに、なぜ人形が？
そう問いかけたって、答えはどこにもない。
キツネかタヌキにバカされてるのかしら。
でも。
もしそうなら、化かし合いに勝てばいいだけのこと。
思い直して、私は促された奥の方へ足を踏み出すのだった。

二体のビスクドールは器用に歩いて城内を案内してくれる。
森と同じくらい、いえ、それ以上に暗い廊下は足音がやたらと響く。
両側の壁沿いにブリキでできた鎧が飾られていて、手にされた槍が鋭い鋒を鈍く光らせている。
天井には天使…ではなく蝙蝠羽の悪魔が悪どい顔で飛び回る天井画。
壁に飾られた彫刻も幼い頃読んだ本の挿絵に出てきたゴブリンだ。
なんて悪趣味。
本日二度目の感想に、思わずまた顔を顰めてしまった。
そうして城をぐるりと見回しながら歩いているうちに、どうやら地下の牢屋らしき場所にたどり着いたようだ。

ロウソクがある場所を照らしてくれる。
ぐらりと影がゆれた。
「お父さん？」
「まさか…リリーか！？」
「ちょ、お父さん！どうしてこんなところに…」
しばらくぶりの再会に手と手を取り合って、鉄格子越しに顔を合わせて喜んだのも束の間。
ぬらりと背後に気配を感じた。
大きな影に覆われて、辺りが一瞬で暗くなる。
異様な気配だった。
振り向くのも躊躇われて、体が硬直する。
「…父親を取り戻しに来たか」
低く地を這うような声。
吐息は獣。
漠然とした恐怖に包まれる。
ぐっと瞳を閉じて、声の主の方へ向き直った。
人形が喋ってここまで案内してくれた。
見たこともない道を通ってきたし、第一あの手紙の文章。
門の彫刻に廊下の天井画、壁の彫刻。
もう何が起こってもおかしくない。
覚悟して、瞼を押し上げる。
「・・・・・・・・・・・・・・・」
嘘…でしょう…。
目を限界まで見開いていたと思う。
呼吸の仕方まで忘れていた。
驚愕。
全身を覆っているであろうライオンの様なたてがみに、口からちらりと見える鋭い牙。
どんなものも切り裂いてしまいそうな爪に、大きな獣の手。
荒野を素早く駆け抜けていそうな逞しい脚。

暗闇でも輝きを放つ力強い碧眼。
視線だけで人を殺せそうだ。
事実、今の私は彼に捕食される寸前だ。
目の前の相手を見た瞬間に、自分の命はすぐに潰えるだろうと思えた。
あの噂は本当だったのだ。
幼い頃から街でまことしやかに語られていた「野獣」の昔話。
人を攫っては喰らい、悪魔のように血に飢えている、と。
どうして父はこんな恐ろしい野獣の住処に入り込んでしまったのか。
考えたところでもう遅い。
私も喰われるのだろう。
そう、全てを悟って諦めようとした時だった。
ぐっと野獣が近づき、いつの間にか床に座り込んでいた私の腕をとって、立ち上がらせる。
え？
それから父を閉じ込めていた牢の扉をすんなり開き
「これで契約は成立だ。お前を解放しよう」
静かな声で告げた。
囚われの身のはずだった父は、乱暴に扱われることもなく、どこからともなく現れた荷車にドサと載せられる。
「リリー！！」
悲壮な声がして、ハッと我に帰れば父が目の前から遠ざかるところで。
「お父さん！！」
叫ぶ私の体を大きな獣の手がつかんで引き止めていた。
すぐに父の姿は暗闇に消えて見えなくなる。
助かったの？
これで本当に父は助かったの？
たまらず野獣に縋り付いて、獣の顔を見上げた。

全身の力が抜けて、足で体を支えられない。
でも私の体は床に打ち付けられずに済んでいた。
野獣だ。
逞しい獣の腕が、私の腰を支えてくれている。
…なぜ？
全ての問いは言葉にならずに消えていく。
けれど。
「そなたの父は無事に送り届けられる。安心するがいい」
「え？」
見抜かれた？
それとも、声に出していた？
「部屋はこちらだ。歩けるか？」
「へ、や？」
「ここで寝たくないだろう？」
「…私、父の代わりに…」
牢に閉じ込められるんじゃないの？
あなたに食べられるのを、ここで待つんじゃないの？
どうして部屋なんて？
心の中の問いかけを、彼はどう読み取ったのだろう。
一瞬だけ怪訝な顔をしたかと思ったら
「言っておくが、私はそなたを喰らったりしない」
なんて言った。

続く

## Vol. 2　野獣？

どこまで歩いても、憂鬱さを増す廊下は重く薄暗い。
やたらと響くのは私の足音と、野獣の足が爪で床をひっかく音だけ。
布で覆われているビスクドールの足は、ぽふぽふと小さな音を立てるのみ。
無言の重圧に押しつぶされてしまうかと思ったけれど、意外なことに、野獣は静かに話しかけてくれていた。
「部屋には一通り必要なものをそろえてある。足りないものがあればいつでもヴィスコンティに言うといい」
「ヴィ、ヴィスコンティ？」
「男の人形の方だ。身支度は女の人形の、シシリエンヌが整えてくれるだろう」
野獣は丸くて大きな指で（ほぼ手で）人形を指し、ビスクドールの紹介をしてくれた。
視線を二体、いや、二人？に向けると、揃ってこちらにお辞儀してくれる。
私もお辞儀を返したかったけれど、それは叶わない。
なぜってそれは、野獣が相変わらず私の腰を支えて…というか、抱えているからだ。
どうやらまだ力が抜けていると思われているらしい。
けれど意外なほど心地よい支えだった。
ふさふさの毛並みもさることながら、なんというか、一つ一つの行為がスマートなのだ。
野獣ってもっと荒々しいものだと思ってたんだけど、彼は違うみたい。
第一彼は私を食べないと言った。
しかも。

「ここがそなたの部屋だ」
通されたのは我が家がまるごと入りそうな大きな部屋で、窓際には天蓋付きのふわふわなベッド。
サイズは多分クイーン？
一人で寝るならどれだけ暴れても大丈夫そうだ。
背丈より大きな窓にはひらひらの桃色カーテン。
クローゼットはウォークインで、多分実家の部屋より広い。
用意された服は全て高級な生地で作られた、仕立てのいいドレスばかり。
えっと。
これを普段着に使え、と？
思わず野獣を見ると満足げに頷かれた。
シシリエンヌも目を輝かせている。
人形だけどちゃんと表情も変わるし、まるで生きているみたい。
「あの…私、本当にこの部屋を使っていいんですか？」
「なぜだ？」
深い碧眼が穏やかに問いかける。
「私は父の代わりでしょう？囚われの身なのに、こんなに至れり尽くせりなんて」
信じられない。
言外に告げて部屋を見回した。
けれど野獣は
「そなたにとってはこの城が檻のようなものだろう。それで十分だ。私はそなたを捕らえたが、傷付けるためでも辱めるためでも、ましてや喰らうためでもない。できる限り快適に過ごせるよう配慮するつもりだ。ここでの生活は保障するし、安心していい」
と、ことのほか穏やかな口調でそう言った。
騙されているのとは違う。
城に閉じ込められるなら、牢は必要ないってこと？
それにしてもこんな立派な部屋を充てがうなんて、一体どうして？

疑問符ばかりが浮かぶ。
それに明るい場所に出てようやく分かったことがある。
ライオンのようなたてがみは夕陽のような黄金色をしていて、きれいに手入れされていた。
身につけているのは、大きな体格に合わせて作られた特大の貴族衣装。
絹糸で織られた光沢のある紺色のジャケットに白いズボン。
ふさふさのしっぽもたてがみと同じ色をして優雅に揺れている。
服から出ている手足は確かに獣のものだけど、爪もしっかり磨かれ、研がれているし、汚れは一切付着していない。
清潔さの代名詞「石鹸の香り」がただよう野獣なんて、誰が想像しただろう。
その野獣がひょいと私の顔を覗き込んできた。
「食事は揃って食堂で食べることになっている。もうすぐ用意ができるはずだ。破けた服を着替えてくるといい。ただし疲れた顔をしている、コルセットのきついドレスよりゆったりとしたものを着た方が良さそうだ」
「…はい」
予想外の心配りまで見せられて、私は素直に頷いた。

小さいといってもシシリエンヌの身長は1メートルくらいある。
人形にしては大きな方かもしれない。
おかげで彼女は軽快な動きでクローゼットから、適当なドレスを見繕って持ってきてくれた。
ついでに椅子に乗りながら着替えを手伝ってくれようとしたのだけど、いつも自分で全てやっている私はそれを丁重にお断りした。
シシリエンヌは働き者だ。

一つやることがなくなってもすぐに次の仕事を見つける。
私が脱いだ破れた服を、あっという間にどこかへ運び、支度の整った私を食堂へ案内するためにすぐ戻ってきてくれた。
「リリー様、こちらへどうぞ」
想像していたよりも落ち着いた声で促される。
やっぱり疑問だ。
人形に声帯なんてあるのかな。
どこから声が出てるんだろう。
ビスクドールのはずなのに表情が変わったりするし。
なんて脱線した疑問が頭をぐるぐるするけれど、シシリエンヌが丁寧に手で促してくれたから、従って部屋を出ることにした。
あれ？
廊下に出た途端僅かな違和感を覚える。
その正体はすぐに判明した。
明かりだ。
野獣…さん、に、案内された時は今の半分ほどの明かりだった。
今は鉛色の鎧が勢ぞろいして壁に飾られていても、最初ほどの不気味さはない。
天井の悪魔はやっぱり好きになれないけれど。
よく見れば足元に敷かれた赤い絨毯は、毛玉一つないくらいきれいに掃除されている。
壁も蜘蛛の巣なんてないし、塵一つない。
歩幅の小さなシシリエンヌが滑るように廊下を歩いても埃が立たないのは、毎日細かい所までしっかり掃除されているからだろう。
内装は悪趣味だけど、キレイ好きってことかしら。
でも、誰が掃除してるの？
シシリエンヌたち？それとも、まさか…。
「どうした？」
「ひっ！？」
野獣さん！？

突然大きなライオンの顔が現れたりするから、反射的に後ずさって悲鳴を上げそうになった。
直後に見えたのは若干耳がしゅんと垂れた野獣さん。
あ。
「あの、ごめんなさい。びっくりしちゃって」
「…いい。誰でもこの顔を見れば驚くだろう」
案の定な誤解をしてる野獣さん。
もちろん顔を見てびっくりしちゃったのは本当なんだけど、獣の顔に驚いたんじゃないの。
「顔に驚いたのではなく、突然現れたから驚いてしまったんです」
きっちり訂正して彼の顔を覗き込む。
くるりとした碧眼は複雑そうな色を見せた。
納得しかねる、って顔ね。
けれど野獣さんは深く追求せず、食堂の椅子を引いて私を座らせてくれた。
少なからず傷ついているのに、責めることも叱ることもなくエスコートするなんて。
とってもジェントルマン。
普通に考えたら自分を捕らえた人喰い野獣と食事だなんて、泣いて悲鳴を上げながら怯えて震え上がってもおかしくない状況。
でも不思議。
ちっとも怖くないの。
おかげでどのくらいの広さなのか比較対象も見つからないような食堂を見回す余裕まである。
天井から吊るされているのは四方八方に光を反射させる豪奢な三段シャンデリア。
壁に描かれているのはやっぱり悪魔なんだけど、彼らが戯れるのは色鮮やかな春の景色で。
窓枠や柱は金で塗られている。
サテンで作られたカーテンはしっとりした光沢を放ち、ロイヤル

ブルーが心を落ち着かせてくれる。
あれって本当にサテン？
もしかしたらもっと高級な生地かもしれない。
食堂の中央に置かれたテーブルはよく磨き上げられて、どこもかしこも輝いている。
アンティーク調の重みある茶色の椅子もテーブルと同じ素材だ。
背もたれを大きく作り、よりかかる場所にはふわふわのクッションまで置かれている。
いつの間にか用意されていたカトラリーは、全て本物の銀食器。
持ち手にはすべて細かな彫刻が施されている。
縁取りに使われているのはこれまた本物の金だ。
これ、やっぱり夢？
現実だなんてとてもじゃないけど信じられない。
けれど
「どうした？」
野獣さんの声はちゃんと耳に届いているし、その感覚もリアルだ。
なぜかおでこに手を当てられてるけど、肉球の柔らかさが心地いい。
両肩に手を置かれて少しだけグラグラ揺らされてるけど、なんだかそれも心地いい。
って、やっぱりこれって夢？
「現実だ」
あー、そうか。
現実ね。
って！！
「！？」
慌てて遠ざかっていた意識を覚醒させる。
おでこにはまだ野獣さんのぷくぷく肉球が当たっていて、穏やかな碧い瞳が私の視線を捉えている。
なんだかバツの悪そうな顔をしてる。

まるでイタズラしたのがバレて怒られた小さな男の子みたいな顔。
どうしてあなたがそんな顔してるの？
あんな手紙をよこした悪党なんじゃないの？
…変な人。
「その、すまない」
「？」
「現実逃避したくなるほど辛い思いをさせているのはよく解っているし、申し訳ないと思っている。だが、こうする他なかったのだ。この姿に驚き、恐怖心を抱くのも…当然だ。だが、せめて食事はしっかり摂って欲しい。そうでなければそなたが体を壊してしまう」
苦しそうに歪められた表情は、切実さを前面に出して、懇願しているみたい。
だから、どうしてあなたが私を心配しているの？
父の代わりに私を捉えたのは、他でもないあなたなのに。
でも。
「どうしてもともに食事するのが無理だというなら私が席を外そう。どうか食事を楽しんでくれ」
辛そうに提案する彼の言葉に頷くことは出来なかった。

続く

## Vol.3　初めての晩餐

困った。
何本もあるカトラリーは、一体どれを使えばいいのかわからない。
家ではナイフもフォークもスプーンも、いつも一本だけだったもの。
首をかしげながらそっと野獣さんを見る。
マネをすればいいかと思って視線を向けたのだけれど、彼は既に一本ずつを手にとって食べ始めようとしていた。
あら。
タイミングが遅かったらしい。
けれど結果オーライ。
野獣さんが私の視線に気づいてくれた。
「こういう夕食は初めてか？」
「はい。お恥ずかしながら」
「そうか。気にすることはない。外側から使うのだ」
なるほど、外側からね。
高価なナイフとフォークを手にする。
器用に一欠片を口に運ぶと、その美味しさに頬が緩んだ。
「上手だ」
ちょっとぶっきらぼうなほめ方だけれど、何だか嬉しくなる。
「ありがとうございます」
笑顔と一緒にそう言えば、野獣さんは手にしていたフォークを落として慌てた。
どうしたのかしら。
あらあらと思ったけど、すぐに気を取り直した野獣さんは、さっきより少し速いスピードで料理を平らげていた。
一方の私は彼に比べて一口が小さいせいか、倍近い時間をかけて食べ終える。

するとすぐに次の料理が運ばれてきた。
初めて目にする大きさのステーキ。
肉厚でワイン色の肉汁がじわりと浮かんでいる。
立ち上る湯気は香ばしい。
臭みを消すための香草もハーブの優しい香りがする。
一口大のステーキを口に入れるとあっという間に旨みが広がって、噛めば噛むほど美味しさが広がる。
「美味しい」
無意識に言葉にすると、向かい側の野獣さんはほわりと表情を崩した。
「気に入ったか？」
「はい」
素直な返答に彼は満足げに目を細める。
そして彼も一口、洗練された仕草でステーキを口へ運ぶ。
なぜかそれを目で追って、反応を待ってしまう。
思ったとおり彼も味に満足したのだろう、頬を緩めていた。
良かった。
そうひとりごちて、ハッとする。
良かった…？
どうしてだろう、胸の中が温かい。
変なのは私の方だ。
いくら想像と違っているからって、相手は野獣さん。
私を食べないとは言ったけど、捕まえたのは間違いなく目の前の人。
人？
既にそんな感覚で彼を見ていたことに気づかされる。
私、彼を人として見ている？
目の前にいる、誰がどう見ても獣の、彼を…？
「どうした？具合でも悪くなったか？」
問いかける口調は穏やかだし、内容は私を気遣うものだし。

確か街の噂で聞いた野獣は、いつでも鋭い牙を剥き出しにして研ぎ澄まされた爪を振り回し、凶暴な手足で捕らえた獲物を引き裂き、血が飛び散るのも構わず、というよりむしろ血肉を喜んで貪り食うって…鬼か悪魔かはたまた魔王か、ってくらい恐ろしい存在だった。

とても「人」だなんて形容できない。

そもそもあんな大きな手で器用にカトラリーを扱ったり、新鮮だとわかる野菜がふんだんに使われた前菜を美味しそうに平らげたり、ぷっくりした肉球で優しくおでこに触れたり、何度も脳内にトリップする私を気遣ったり、本当に野獣ならそんなことするかしら。

私はしげしげと野獣さんを見つめる。

丸くて温かな碧眼は戸惑うようにこちらを見つめ返す。

そうよ。

本当に野獣ならこんな血の通った優しい目をする？

人の体調や精神状態を気遣ったりする？

自分が優位に立っていることは十分に分かっているだろうに、あまつさえ捕らえた人間の食事を優先して自分は席を外すなんて言い出したりする？

答えは全て、ノーだわ。

彼が本当に野獣なら数々の振る舞いをするわけがないもの。

…かといって、着ぐるみにも見えないのよね。

体を支えてもらっていたからよく分かる。

彼の体温は本物だ。

「あの」

「何だ？」

野獣さんは突然口を開いた私に困惑しながら返事をする。

ほらね、こんな反応は高い知能を持った人がすることよ。

本能のままに人を喰らう野獣のそれではないわ。

「あなた、本当に…本当に野獣さんですか？」

目の前の可憐な唇はそう告げた。
は？
私の顔はさぞ情けないものだったろう。
あまりに脈略のない問いかけに一瞬言葉を失う。
なぜかこの娘は時折考えに耽る事があり、無言でくるくる表情を変えるところがある。
最初は私の姿と自分が置かれた状況に悲嘆し、恐れ、怯えているせいかと思ったが、私が席をはずそうと提案したのをきっぱり断ってから、どうやら怖がって現実逃避しているのではないとわかった。
食事が運ばれれば嬉しそうに頬を綻ばせて料理を口にしているし、緊張している様子も見られない。
少しの間和やかな時間が過ぎていたのだが、彼女は再び突然思案顔をした。
そして、なぜかじっとこっちを見ていると思ったら、先の問いかけを口にしたのだ。
何がどうなってあんな質問が飛び出したのか分からない。
分からないが…ここまで冷静に接してくる人間は初めてだった。
あの父親も肝が据わっていたが、さすがその娘だ。
地下牢では父親を心配する思いもあってか、突然の出来事に慌てたり怯えたりする様子を見せたが、これまでの短い時間で私を観察していたのかもしれない。
本当に野獣か、などと聞かれたのは初めてだ。
「…見ての通りだが」
内心湧き上がる嬉しさをひた隠したせいで、やたら威圧感のある答え方になってしまう。
けれど娘は少しも変わることなくこちらを見つめている。
そして突然立ち上がると、私の背後に回った。

手には何も持っていない。
とはいえ何をされるか分からず警戒した。のだが。
ふわり
小さな手が首筋に触れる。
それからペタペタと、たてがみを撫でるかのように手を動かし
「やっぱり」
小さく呟いた。
「やっぱり、とは？」
問えば彼女は再び自席に戻り、複雑な笑みを浮かべる。
「もしかしたら着ぐるみかも、って思ったけどやっぱり違った。その姿は本物ね」
ああ、その「やっぱり」だったのか。
納得したが、直後、彼女は丸い栗色の瞳をまっすぐこちらに向けていた。
まだ疑問があるのだろうか。
視線で次の言葉を促すと、彼女は小さく微笑む。
それは私の心臓をどくんと動かすには十分すぎる魅力を放っていた。
なんとか動揺を押し隠すが、この体格では鼓動まで伝わってしまいそうだ。
しかし
「あなたの名前を教えてください」
慌てる私の様子などおかまいなしに彼女はそう言った。
名前？
「お互い呼び合う名前は必要でしょう？いつまでもあなたを野獣さんって呼ぶのは失礼だもの」
「ではそなたの名前も教えてくれるのか？」
「もちろん。あ、そうよね、名前を聞くならこちらから名乗るのが礼儀ね」
いや、こんな私に名前を教えてくれるのか、という意味で問い返

したのだが、彼女は別の解釈をして納得していた。
そしてさっと華奢な手を差し出す。
これは？
戸惑っていると、彼女はその手で私の手を優しく握る。
握手の意味だったのかと、鈍った頭はのろのろと反応する。
彼女の行動を先読みしてリードしなければ、と思う心と反対に体は鈍りきっていた。
華々しい社交界で姫君たちを相手に、夜毎ダンスをしていたのはもう数百年も昔のことだ。
心は覚えていても、脳はそれらを少しずつ忘れてしまったのかもしれない。
なんとも言えない虚無感と苛立ちが心に巣食う。
けれどそれは一瞬で吹き飛んだ。
「私はリリー。あなたのお名前は？」
「…ラピス…ラピス・ランフォードだ」
「そう。ラピスさんっておっしゃるのね。どうぞよろしく」
「あ、ああ」
彼女の笑顔は、穏やかに輝く月のようだった。

続く

## Vol.4　闇夜の探検

住んでいた町の中央には噴水広場がある。
収穫祭に聖夜祭、季節ごとのお祭りが開かれる町一番の広場。
祭りの日には近隣の町や村からも人が集まり、広場は人の波に埋め尽くされる。
多分数百人以上の人が訪れるだろう。
そのくらい、広いと思うの。
でもね、ここは室内よ？
なのにどうしてこんなに広いのよーっ！！
と、心の中で叫んだ私は、どこぞの池か湖かと思うようなだだっ広いお風呂を独り占めして、とっても贅沢な入浴タイムを過ごした。
湯上りに用意されていたのはシルクの夜着と、何か動物の毛で作られたふかふかのガウン。
おかげで湯冷めすることなく部屋にたどり着けた。
部屋はシシリエンヌがすっかり整えてくれていて、ベッドの横にあるサイドテーブルの上には、心地よい眠りを誘うほんのり甘いホットミルクまで用意されていた。
室内の明かりはほとんどを消されているけれど、大きな窓から覗くまんまるの月が照らしてくれているおかげで、ちょうど良い明るさだ。
ぬくぬくしたベッドに潜り込んでも月が見える。
空には星が敷き詰められたかのように瞬いていて、静寂が広がる。
ふう、とついたため息が何だかひどく響く気がした。
お父さんはどうしているかしら。
無事に家までたどり着けたかしら。
あの人たちの我侭に振り回されていなければいいけど。
…なんて心配しても、もう届かない。
せめて私は無事だと伝えたい。

野獣さん、ううん、ラピスさんは私を食べるつもりはないって。
檻も必要ないし、このお城での生活も保証された。
今まで見たこともないような豪華な部屋とドレスに食事まで与えられて、薔薇が浮かんだお風呂まで入ったわ。
ベッドは天蓋付きのお姫様仕様だし、お世話をしてくれるメイドさんもいるのよ。
人形だけど。
初めて彼を見たときは絶望したけど、もうそんな気持ちもすっかり消えた。
ここまで大切に扱われたら、嫌な気分なんてしない。
疑問はたくさんあるけどね。
そう、考えれば考えるほど疑問はわく。
思い返せばあの手紙の文面とラピスさんが一致しないのもおかしいんだ。
あんなあからさまに悪党な文章で脅す人なのに、ことあるごとに私を気遣ってくれた。
ちょっとした仕草や言動から、彼は獣である自分の姿を気にしているようだし、何より動作の全てが上品だった。
本当に野獣か、と問えば「見ての通り」なんて答えたけど、今にして思えばちょっとはぐらかされた気もする。
この城の内装だって彼とはギャップがありすぎる。
おどろおどろしい悪魔より、天使のほうが似合うもの。
それにあのビスクドールたちの存在も、不思議極まりない。
普通じゃないわ。
「絶対何かある」
独り言をつぶやいて、完全に覚醒している体を起こした。
もう一度ガウンを羽織って、近くにあった燭台に火を灯す。
音を立てないように慎重にドアを開けると、そっと廊下に足を伸ばした。
やっぱり不気味だけど、女は度胸よ、いざ進め。

自分で自分を励ましながら、しんと静まり返った暗い廊下を歩き出す。
全神経を目の前に集中させながら辺りを見回すと、当然だけれど壁や天井の模様がぼんやり見えるだけ。
だから仕方なくどこまでどう続くか分からない廊下の先を進むことにした。

しばらく道なりに進むと、突然分かれ道に出た。
まっすぐ進むか、右の階段を上がるか。
ここまでいくつも角を曲がったから、微妙に方角が分からなくなっている。
窓もないから月の位置も確認できない。
城の外観も大きすぎて見えなかったから、この階段がどこへ繋がっているかなんて想像もできない。
さて、どうしようか。
と、迷っていた、その時だった。
ふっと背後に気配を感じてドキリと心臓が跳ね上がる。
直後、それがやけに近付いたのを感じた。
何!?
「ひゃ・・」
あ!!って、叫ぼうとした私の口は、大きなもふもふしたものに塞がれた。
声と空気を一瞬にして押さえ込まれる。
燭台を握ったままだったのは奇跡だ。
瞬間的にパニックになったけれど、見知った瞳を見た途端急激に冷静さが戻ってくる。
大人しくなった私に安堵したのか彼はそっと手を離してくれた。

「ラピスさん？」
「いかにも。こんな夜中にどうした？そなたの部屋はずいぶん遠くにあるぞ？」
「…あ、あは」
正直に言ったら怒られちゃうかしら。
笑って誤魔化してみるけれど、ラピスさんは動じない。
「眠れずに探検ごっこか？」
あらら。バレていたのね。
「ごめんなさい」
観念して頭を下げる。
と、ふわり、肩に何かかけられた。
顔を上げると鼻の頭をちょいっと指で突かれる。
いたずらした子供をたしなめるみたいに。
「そんな薄着では風邪をひく。眠くなるまで案内してやるから、それを着ておきなさい」
そう言うと、ラピスさんはくるりと背中を向けて歩きだした。
え、え、え？
「あ、待って」
慌てて彼の後ろを歩いていく。
案内って？
彼はいつの間にか私の手から燭台を受け取って、先を照らしながら階段を上がり始めた。
どこへ行くのかしら。
こうして行き先も分からない夜のお城探検が始まった。

階段を上がってすぐの廊下はギャラリーのようだった。
等間隔に肖像画や風景画が飾られている。

少し進むと芸術品と呼ばれるたぐいの宝飾品がガラスケースに収められている。
一つ一つに簡単な説明を加えて、ラピスさんは明かりで照らしてくれる。
その中の一つ。
やたらと目を引く美男子の肖像画がある。
不意に私は足を止めてそれを見上げた。
「リリー？」
「あ…」
「気になるか？その絵が」
「はい。とっても気品溢れる素敵な方ですね…」
思わずほうっと息を着くと、なぜかラピスさんのしっぽが大きく揺れた。
ん？
どうしたんだろう。
そう思ったけど、ラピスさんはすぐ
「次の場所へ案内しよう」
と口早に告げて立ち去ってしまった。
私もそれにつられて足を動かすけれど、目の端にある文字が映った。
「ル？ラ？」
肖像画の下に金色の絵の具で何かが書かれていたのだ。
あれは多分名前。
作者の名前か、それとも肖像画の彼の名前か。
どちらにしてもこの暗がりでは、咄嗟に読み取るのは難しい。
なぜかもっと眺めていたくなる絵だったけれど、遠ざかってしまったラピスさんの背中を追いかけることにした。
ラピスさんはまだしっぽを大きく揺らしている。
そうして彼に導かれてたどり着いたのは、大きな真紅の薔薇が咲く小さな部屋だった。

「この薔薇は？」
「魔法の薔薇だ」
言われてみれば、薔薇は鉢植えにされることもなくガラスケースの中でふわふわ浮いている。
魔法？
「全ては魔法なのだ。この薔薇も、私たちの世話をしてくれる人形たちも、何もかも…この城にも魔法がかかっている」
少しだけ忌々しそうだ。
つまりこの城にかけられたらしい魔法は悪い魔法なのだろう。
彼にとっては。
そして全てが魔法なら、ビスクドールたちが喋ったり動いたりするのも納得できる。
もしかしたらこのお城が隅々までピカピカなのも魔法が関係しているのかもしれない。
だってたった二人の人形とラピスさんだけでは、このお城をここまでキレイにするのは無理だもの。
例え全てに魔法がかかっていても…ん？
そこまで考えてふと気付く。
何もかも魔法がかかっているなら、まさか、彼も…？
「ラピスさん、あなたにも魔法が？」
問えば、ピクリと彼の耳が動いた。
しかしすぐに彼は私の頭に大きな手をおいて、優しく髪を撫でる。
「リリー、これはきっと夢だ。考える事が好きな君の、夢の中の話だよ。さあ、もうベッドへ入っておやすみ」
私の小さな体は瞬時抱き上げられて、そのままどこかへ連れて行かれる。
「ラピスさん」
呼びかけても彼はもう答えてくれない。
その代わり。
笑顔をくれた。

泣いているのかと一瞬ドキリとするような、切ない笑顔を。

続く

## Vol. 5　ラピス

朝になって目覚めが訪れるのは随分突然だと思う。
起きようと思って意識する必要も無く、体が勝手に目覚めるのかしら。
気がつくといつもより眩しい日差しを浴びてふと瞳を開けた。
ん…ここは…私のベッドだけどちょっと違う。
お城の、お姫様ベッド。
つまり昨日の全ては現実だったてこと。
改めて意識すると、朝から奇妙な感覚に陥る。
怖さはない。
いたって穏やかな一日の始まり。
ベッドから出ると、ジャストタイミングでシシリエンヌがやってくる。
どうやって頃合を見計らってるんだろう。
私の行動が先読みしやすいのか、彼女がとっても優秀だってことなのか。
どちらにしても支度はすぐに整う。
今日のドレスは落ち着いたオレンジ色。
柔らかい素材で作られていて、きつく締め付けるコルセットもない。
昨日に引き続きの心遣いなのかしら。
どちらにしても都会で流行りのコルセットは苦手だから、助かった。
シシリエンヌは私の顔に薄化粧を施すと、昨夜のように食堂まで案内してくれた。
いつでも誰かにエスコートしてもらうなんて、本当のお姫様になったような気分。
食堂につけばそこには既に彼がいた。

「ラピスさん」
「ああ、リリー。おはよう。昨夜はよく眠れたか？」
分厚くて１ページに文字がぎっしり書かれた本を片手に顔を上げてくれる。
しかも鼻にちょこんとメガネをかけて。
えーと。
「お陰様で。ところでそれは近視？遠視？」
「近視だ」
きっと読書する野獣さんは世界であなただけね。
思わず笑顔を浮かべると、ブルンとラピスさんのしっぽが盛大に揺れた。
…もしかしてこれって犬と同じで嬉しいと揺れちゃうの？
それなら今の会話のどこに喜んだんだろう。
疑問が浮かんだけど、答えはすぐにわかった。
「リリーは私の顔を見ても怯えないのか」
小さく彼が呟いた。
なるほど。
喜んだ理由はそれね。
「怖くないもの。夜の探検にも付き合ってくれたし。昨夜はありがとう」
うっかり抱き上げられたまま寝ちゃったくらい、すっかり安心してたことに今更気付く。
短時間で急展開を見せたから、疲れていたのもあるんだろうけど…。
ラピスさんの腕が心地よかったのも本当だ。
そこでふと思い出す。
昨夜見たあの肖像画。
身分の高い、きっと王子様の絵。
あれは誰の肖像画なのかしら。
聞いたら答えてくれるかどうかと彼に視線を向ける。

碧い目が、穏やかにこっちを見ていた。
「そなたの瞳はよく動く」
「え？…あ、あ！」
言われて気付いた。
そうよ、あの時は違ってた。
昨夜、一度だけ違っていたの。
「ラピスさん、昨夜は私を「君」って呼んだわ」
間違いない！
って、思ったんだけど。
ラピスさんはクスクスと優しく笑う。
テーブルにはヴィスコンティが運んでくれた、焼きたてのパンやベーコンエッグにソーセージ、オレンジジュースがあっという間に並べられる。
大きな獣の手が目の前にパンを寄せてくれた。
「きっと夢でも見たのだろう。私はいつでも「そなた」と呼んでいる」
そう言われて納得できるだろうか。
夢って。
昨夜お城を一緒に回ったことは否定しなかった。
私は抱き上げられてベッドまで連れて行ってもらったけど…、そこまで覚えているのに。
ラピスさんが見せた、あの、胸がギュッとするような切ない笑顔だって覚えているのに。
どこからが夢でどこまでが現実だったの？
分からなくなる。
それなら、と思って
「あの肖像画は誰のものですか？」
と問うことにした。
「誰だったかな。ずいぶん昔のものだ。私も知らない」
「本当？」

「ああ、本当だ」
何だかそつ無くはぐらかされた気分。
私は一口大にちぎったパンを口に入れた。
咀嚼すると香ばしい香りが口いっぱいに広がって嬉しくなる。
向かい側では彼も同じように食事をしていた。
あの口なら一口で食べられそうなパンを、器用にちぎっている。
流れるような動作でジャムを塗る姿は上品そのものだ。
そして不意に私の視線に気づくと、食事を促すように目で合図される。
穏やかな碧い目。
碧い、目。
…そうだ、彼の目も碧かった。
ラピスさんと同じ色。
でも、どうして？
瞬間的にいくつも推測が浮かんでは消えていく。
知りたい。
このどうにもギャップの激しい野獣のことを、もっと知りたい。
魔法がかけられているのだというこの城のことを知りたい。
そうとなったらこのあとの予定は決まったも同然。
「ラピスさん、お城の中をもっと見て回ってもいいですか？」
少し身を乗り出して尋ねると、彼はちょっとだけ考える仕草をしながら
「ふむ。城の中は自由に歩いて構わない。ただし、外に出てはいけない。城の外は危険だから」
そう言った。
城が檻の代わりだからだめ、じゃないところがラピスさんらしい。
魔法がかかった場所ならもしかして、敷地内にも何かあるのかもしれないし、城を取り囲む森にも何かあるのかもしれない。
「分かりました」
私は素直に頷くことにした。

だって外に用事はないものね。
お父さんのことは心配だけど、彼が安心していいって言うならそれは本当だと思うから。
とにかく今はきちんと食事をして、早速あの肖像画を見に行かなきゃ。
俄然やる気の出た私は、用意された朝食をきれいに完食したのだった。

昨夜ラピスさんと辿った道を思い出しながら廊下を歩く。
途中にはやたら大きな観音開きの扉がある部屋もあったし、私の背丈より少し大きめの扉がある部屋がいくつもあった。
だけど目指すのはただ一箇所。
絶世の美男子が描かれたあの肖像画のある廊下。
いくつも角を曲がったあと現れる階段を昇っていく。
一段ずつ上がった先に見えたのは、しばらく使われていないだろうギャラリーを兼ねた廊下。
昨日と同じように展示品の間を抜けて、目的の絵を目指す。
…あった…！！
「これだ…」
見上げればそこには昨夜見たのと同じ、３６０。どこからみても優雅で気品のある凛とした王子様。
うん、王子様って言葉がピッタリ似合う。
絵の右下には金の絵の具で書かれた文字。
Ｌａ…？
他は擦られたような、削られたような跡があって読めない。
それにしても何て素敵な人だろう。
おとぎ話の挿絵に出てくる王子様よりずっとずっと格好いい。

涼やかで理知的な瞳は冷たさを宿すことなく、柔らかで人懐っこい。
肩よりほんの少し長く伸ばされた金髪はゆるく曲線を描いている。
王子様（と呼ぶ事にした）の髪は純粋なブロンドよりも、夕焼け間近の黄金色に近い。
頭頂部はオレンジがかっていて、毛先に向けて徐々に色素が薄くなっている。
ロイヤルブルーの上着がよく似合っている。
ん？
黄金色の髪に碧い瞳、それに、ブルーの服…？
私の中で浮かんだ「まさか」が確信に近くなる。
もしかして。
「ラピス…さん…？」
肖像画に描かれた滑らかな頬に手を伸ばす。
「やはりここにいたのか」
ピク
寸でで手を止めた。
声の主は今朝と変わらぬ様子でゆったりと近付いてくる。
「旺盛な好奇心は真実を探し当てる、か」
微笑んでいるのに、どこか悲しげだ。
「この絵は、あなたね」
「随分昔のものだよ。今は見る影もない」
おどけて言うけど、ちっとも笑い話にならない。
「魔法はあなたにもかかってる。だから野獣の姿に？」
「そうだ。この姿では人も寄り付かない。疎まれるくらいならいっそ他人と関わるのをやめた。ところが度々迷い込んでくる人間たちを助けようと手を差し伸べれば、彼らは皆一様に私を「人食い野獣」と罵り、怯え、人々に話をしたのだろう。おかげでこの城には誰も近寄らなくなった」
「じゃあお父さんは久しぶりの迷子？」

「ああ。とても変わっていて、優しい人だな。そなたに…いや、君に、薔薇を一輪どうしても渡したいのだと懇願されたよ」
ラピスさんは昨夜みたいに私を「君」と呼んで、僅かに口調を変えた。
というより、戻したんだろう。
肖像画の王子さまがラピスさんならそうね、やっぱり「そなた」より「君」が合ってるもの。
「薔薇を？」
私は問い返す。
お土産はいらない、大丈夫って言ったのに、お父さんたら。
嬉しくなって頬が緩む。
すると、大きな手が私の髪をそっと撫でてくれた。
「健気な一人娘にせめてもの土産にしたいと言ってね。彼は私を見ても怯えたりしないし、普通に話をしてくれた。君のことも色々教えてくれたよ。意地悪な継母と姉妹に嫌がらせを受けながらも彼を助け、一生懸命家事をしている働き者だと」
「お父さんの方が働き者よ。それにお人好し」
「ならば君はお父さんに似ているな」
「どうして？」
「こんな姿の私と普通に会話してくれるし、微笑みかけてくれる。さらに私の正体に気付いた」
「でも最初は怯えちゃったわ。ごめんなさい」
「謝ることはない。あの場面では誰でも怯えるだろう。それに怯えてもらわなければならなか…」
「え？」
「あ。いや、いいんだ」
明らかに「マズイ」って顔をして取り繕い始める。
今絶対失言ですね？
ちょっと目を細めてじっとみつめると
「いや、その、あー、うん」

碧い目がぐるぐる泳いでる。
この様子だとピンと来ちゃったわ。
「お父さんが何か企んだ？」
だって私の手元にお父さんが懇願したという白い薔薇は届いていない。
それにこんなに素直で紳士なラピスさんが悪巧みできるはずないもの。
知恵を貸したとすればお父さんだけだ。
私は彼の沈黙を肯定と受け止めた。
「どんなことを企んだのかは分からないけど、あなたが王子様で魔法をかけられてしまったってことはよく分かった。そうすると疑問は一つだわ」
「疑問？」
「あなたの魔法はどうすれば解けるのか、ってこと」
「…」
ラピスさんの目がパチパチ瞬きをする。
そうね、ここからが本当の始まり。
続く

## Vol. 6

ギャラリーを兼ねた廊下の端には、展示物をゆっくり眺められるよう大きなソファがしつらえてある。
深いエンジ色のビロードでカバーされた、クッションの良いものだ。
ほんの少し腰掛けただけで体がグッと沈み込む。
油断すると後ろへひっくり返りそうになるのを、ラピスさんはそっと支えてくれた。
腹筋に力を入れて前かがみの姿勢を保ちながら彼の方へ向き直ると、ふわりとした獣の手が私の手を引いてくれた。
これで腹筋の力を緩めても、ひっくり返らないで済む。
彼の手はほんわか温かい。
「ありがとう」
「どういたしまして」
さりげなくこういう事してくれちゃうところがニクイっていうか、何だか照れくさいというか。
あくまでも自然にやってのけちゃうしね。
頬が熱くなっちゃうのは私だけなんだもの、ちょっとクヤシイ。
だけどそんな気持ちを表に出すのはもっと恥ずかしいから、私も気にしないふりで手を引いていてもらうことにする。
聞きたいことがたくさんあるんだから。
「ねえラピスさん、どうして口調を変えてたの？それに「そなた」なんて呼んだりして」
「少しでも威厳がある方がいいと言われたからだ。気さくな話し方ではちっとも怖くないと言われたよ」
妙なアドバイスをしたのは間違いなくお父さんね。
本来のラピスさんは心地よいテナーで、語りかけるように話をし

てくれる。
堅苦しさも気難しさもないし、荒々しさなんてもってのほか。
最初からこの調子で話をされたら、私もきっと怖がる必要なんてなかった。
いや、外見だけを見ればやっぱり怖がったかもしれないけど、多分話しているうちに「何か違う」と思っただろう。
お父さんは私がそう思うことを知っていたんだ。
だから怖がらせるために演技をさせたのね。
自分も最高に怯える演技をした上で。
「一体お父さんとどんな話をしたの？あの手紙の文章もお父さんが考えたんでしょう？」
言えばギクリ、彼の表情が強ばる。
「あんな悪党めいたセリフ、あなたには似合わない」
「そ、そうか？」
気まずそうでいて嬉しそうな、複雑な表情を浮かべた。
そんな仕草はイエスって言ってるのと同じ。
今まで彼を「人食い野獣」なんて言いふらした人ははっきり言って大馬鹿だわ。
彼が本当は優しい人だってこと、一晩も経たないうちに分かっちゃうのに。
「で、どうしてお父さんは囚われたふりを？」
そう問いかけると、彼は急に真剣な表情に戻ってまっすぐこっちを見た。
「困ったな」
「え？」
「言わない約束なんだ」
「約束？」
「彼は私のことを他言しない。代わりに私も彼の事情は君に話さない」
「どういうこと？」

「彼の望みだよ。ただ、彼は君をあの家から解放したいと言っていた。そのためにはこうでもしないと君は彼を助けるためにあの家を出ないだろうからと」
頭をガツンと殴られるくらいの衝撃だった。
彼の口から語られたお父さんの思いは、予想もしていなかったから。
「私を、解放？」
「あのままだと君は一生継母たちにこき使われて、花咲く時期を何の楽しみもなく過ごしてしまうことになる。彼は君に自分自身の人生を送って欲しいと願っていたよ」
「自分の、人生を…」
「モンスターたちの言いなりになるしかなかった彼は、自分自身を責めていた。君を巻き添えにしてしまったから。彼は今でも君の亡くなったお母さんだけを愛しているんだよ。その思い出と君を守るために再婚した」
「何ですって…？」
急激に怒りがこみ上げてくる。
あの人はまさかお母さんと私を人質にしたの！？
どうしてそんな…どうして…？
感情が渦巻き始める。
元から嫌いな人間に怒りを向けるのは簡単だ。
憎しみだって楽に倍増される。
無意識に握り締めた拳は爪が食い込んで血を滲ませていた。
「リリー」
その手を、温かな手が解いていく。
「ラピスさん…？」
「いけない、自分を傷つけては」
「あ…」
「激しい怒りや憎しみは瞳を濁らせる。真実が見えなくなってしまうよ？」

小さな子供をあやすように宥められればそれが尤もだと頷ける。
昂った感情は思考を鈍らせるだけ。
あの人の思うツボなんて絶対にごめんだ。
だとしたら、今の私にできることは何？
やらなきゃいけないことは？
「助かるならみんな一緒よ」
「うん？」
「あなたは魔法から、私とお父さんはあの人から。みんなが解放される方法を考えなくちゃ」
「…全てを叶えるのは難しいと思うが」
碧い瞳が曇る。
酷く悲しげな痛みが浮かんでいる。
ラピスさんはきっと魔法は解けないと思ってる。
長い間解けずにいるのだから無理もない。
でもね、毒には必ず解毒剤があるのと同じ。
どんな魔法だって絶対に解く方法があるはず。
一人じゃどうにもならないことも、一緒ならどうにかなるものだから。
「きっと見つかるわ。元の姿に戻る方法が」
「…ああ」
歯切れの悪い返事だ。
「どうしたの？ラピスさん」
「ん、いや…そうだな、リリーが言うなら見つかるかもしれないな、私が戻る方法も」
「うん」
ラピスさんは不意に眉を顰めて、微苦笑を浮かべようとした。
それは失敗して悲しげな顔になっていたけれど。
どうしてそんな顔をするの？
心に浮かぶ問いかけを、口にすることは出来ない。
呼び止めることもできないまま、少し肩を落とした彼はそのまま

どこかへ立ち去っていった。
寂しげな後ろ姿を残して。

続く

## Ｖｏｌ．７　秘めた願い（前書き）

一気に時間が経過しております。どうしてもラピス視点が書きたかったのです。

## Vol.7　秘めた願い

その薔薇は宵闇の中でもはっきりと輝いていた。
庭園に植えた薔薇ではない。
自然に生息するはずのない薔薇だ。
私の運命を告げる真紅の薔薇。

「みんなが解放される方法を探さなくちゃ」

あの日彼女はそう宣言した。
曇りなき無垢な瞳は一層輝きを増して見えた。
嬉しくないはずはなかった。
何も知らない彼女の言葉は、ただ、私にとって少しだけ残酷だったのだ。
そして黙っていることしかできない自分の無力さを呪った。
本当は全て分かっている。
私とこの城にかけられた魔法の解き方も、彼女の継母の正体も、何もかも。
リリーの父親も同じだ。
全て知っている。
けれど口に出すことは禁じられていた。
かけられたのは「魔法」という名の「呪い」。
解き方を言おうものなら即座に声を奪われる。
だから彼女自身に気付いてもらう必要があるのだ。
リリー、君は知らないだろう。
自分がどれほど重要な鍵を握っているか。
彼女が来てから3週間が経つ。
あれからリリーは毎日魔法を解く術を探し続けている。
一日の大半を書庫で過ごし、最初は一文字も読めなかった古文書

も、今では半分以上読み進めただろうか。
突然行動を起こした彼女を心配したヴィスコンティとシシリエンヌはこまめに休憩するよう私に進言してきた。
さらに二人のおかげで私はリリーの指南役になっている。
古文書を読めるのは私だけだと彼女に伝えたらしい。
私は既に研究し尽くした古文書を再び彼女と読み解くことになった。
自分で読めるのだから、書かれていることが真実ならとっくに私は元の姿に戻っている。
彼女もそれに気付くはずだと二人にいえば、古文書はリリーが初めて見つけたということにしておいた、などと言う。
おかげでリリーと過ごす時間が増えたのだから喜ばしいとは思うが、良心が痛むし罪悪感が拭えない。
しかし彼女は真っ先に私を元に戻そうとしてくれている。
それが何より嬉しかった。
父親のことも早く助けたいと願っているだろうに、私を優先してくれた。
希望は潰えていないのだ。
それならばと、私は彼女の父親が行っていた通り、リリーに接してみることにした。
リリーはしっかり者だが、空想するのが好きらしい。
家事の合間には勇者や王子、お姫様に魔王、ペガサスにフェニックス…とにかく冒険やハッピーエンドの恋物語を好んで読んでいたという。
いつか王子様が、と夢見ていたらしい。
だからリリーに魔法を解かせるのなら、本物の王子であることを最大限利用しろ、と言われた。
現実の王子様は物語の王子さまよりずっと素敵だろうから、と。
そのアドバイスに従って、常にリリーをお姫様扱いしてみると、彼女は予想外の反応を見せた。

私にとっては何の苦もなくできる立ち居振る舞いとエスコートだが、慣れていないリリーはいつも顔を真っ赤にしてソワソワしている。

人に甘えることもなく、夢中で家事をこなしてきたリリーだ。

突然蝶よ花よと大切に扱われることが照れくさいらしい。

慌てる姿も戸惑う姿もどうにも可愛くて、私を喜ばせるだけなのに、リリーは相変わらず私に手を引かれるたびに小動物のような動きをしてみせた。

さらに、一緒に過ごしているうちに分かったのだが、彼女は何もないところで躓くという癖を持っている。

エスコートされると慌てるから、余計躓きやすくなるのだが、それを抱きとめるのも私の役目になっている。

役得だ。

獣の腕に抱きとめられても彼女は嫌がらない。

ホッとしたような顔でこちらを見上げて屈託なく「ありがとう」と言う。

思わずギュッと抱きしめたい衝動に駆られるが、どうにか抑え込むのに必死になる。

私の心臓は早鐘を打ちっぱなしだ。

彼女の澄んだ瞳が
りんごのように色づく頬が
瑞々しく輝く薄桃色の唇が
絹糸のように柔らかく滑らかな髪が
真っ直ぐ人を思いやる温かな心が
時折この獣の手をぎゅっと握る小さな手が
彼女のすべてが

愛しい。

けれど。
目の前でひとひら、花びらが散る。
私に残された時間はあとどれくらいなのだろう。
花びらの数は大分少なくなった。
リリー、君は私をどう思っている？
恋でなくとも君の思う「好き」の範囲内に入っているだろうか。
私の運命は君が握っている。
どんな結末を迎えても、受け入れる覚悟はとっくに出来ている。
それでも一縷の望みに賭けてみたい。
醜い野獣の真実を見つけた、奇跡の瞳。
君がこの呪いを解いてくれる。
そう、信じたい。
リリー…

心から、強く願った、その時だった。
「ラピスさん」
不意に背後から声がした。
思いもよらない偶然に驚きながら振り向くと、そこには明らかにしゅんと両肩を落としたリリーの姿がある。
一体どうしたというのだ。
初めてここへ来た時以来見せたことのない姿に嫌な予感がよぎり、彼女に歩み寄ろうとした。
が、途中で足を止めることになる。
「ごめんなさい」
とめどない涙が彼女の頬を伝っていた。
小さな歩幅でこちらへ駆け寄ってくる。
両腕で抱きとめると、リリーはそのまま静かに私の胸に顔を埋めた。
「リリー、何があった？」
「…なかった」

「うん？」
「見つからなかった。どこにも、なかったの」
何が、などと問う必要はない。
必死に古文書を読み進めたのだろう。
恐らく全て読み終えたに違いない。
けれどそのどこにも魔法を解く術は載っていなかった。
そういうことだ。
彼女は自身の希望を古文書に見出した。
だから懸命になって読み解いてきた。
あれが「魔法」だと信じているから。
その懸命さが今は仇になっている。
痛いほどリリーの思いが伝わる。
しかし、まだ、だ。
「泣くのは早いよ」
「…え？」
「君がいる」
「っ、私っ？」
しゃくりあげながらリリーが顔を上げる。
そっと体を離して彼女を見つめれば、丸い瞳が赤く腫れていた。
「魔法を解く鍵はリリーだと信じてる。だから泣かないで」
「鍵が、私？」
「そう。君の涙が、想いが、必ず魔法を解いてくれる。君が、希望だから」
信じているよ。
いつか私の想いが届くことを。
そうしてもう一度腕の中にリリーを抱きしめた。

続く

## Ｖｏｌ．８　ディナーパーティー（前書き）

年の瀬間際に始めた「小説家になろう」での活動ですが、本年はこの作品でしめくくる形となりました。
まだまだ連載は続きます。ほかの作品ともども、来年もどうぞよろしくお願いいたします。

皆様に幸せがたくさん訪れますように…よいお年を！

## Vol．8　ディナーパーティー

とある朝、珍しく活発な様子のラピスさんが食堂で宣言した。
「今夜はパーティーを開く。それぞれに準備をお願いしたい。念入りにな」
ヴィスコンティとシシリエンヌはすぐに頷くと、あっという間にどこかへ行ってしまった。
けれど彼は
「久しぶりの宴になる。アロルド、窓やカーテンを頼む。ブルーナはチェレスティーナやカルロッタと共にフロアをよろしく。クラウディアにジュリアーノは楽器の用意を。手入れはフラヴィオ、任せたぞ。厨房はパトリツィオ、取り仕切ってくれ。さて、手の空いている者は二手に分かれるぞ。一方はウンベルトと庭園の手入れを、もう一方は私とリリーを手伝って欲しい」
次々に指差しながら指示を出していく。
まるでオーケストラの指揮者みたい。
この後何が始まるのかと思って彼の指先を目で追うと、思ってもみないことが起こり始めた。
近くに置かれていた小道具たちが動き出し、蜘蛛の子を散らすように四方八方に散らばっていく。
コート掛けも足置きも、羽ホウキやタワシにチリトリも、工具箱までするすると動いて食堂を出て行った。
食堂は必要最低限のものだけが置かれた殺風景な部屋になる。
「これも魔法？」
「驚いたか？」
「もちろん！しかも名前がついてるなんてびっくりだわ。もしかしてみんな…」
「昔からこの城に仕えている者たちだよ。魔法のせいで姿は変わってしまったが、あの頃と変わらぬ忠誠で今も私を支えてくれている」

「そうだったの…。みんなの魔法はどうしたら解けるの？」
「おそらく私の魔法が解ければ、この城ごと全て元に戻るはずだ」
さりげない口調で彼は言う。
「リリー、だからと言って責任を感じる必要はない。今はとにかく今夜に備えなくては」
ともすれば落ち込みそうになる私のことなんてお見通しなんだ。
楽しげな瞳で私の顔を覗き込んで、食堂を出るよう促す。
今夜パーティーを開くなんて突然の提案に、城中が浮き足立って賑やかだ。
廊下に出ると楽器を調律する音色や床を磨く音がする。
ラピスさんは満足げにそれらを眺めて、私の肩を抱きながら部屋までエスコートしてくれる。
「きっと部屋ではシシリエンヌが取って置きのドレスを用意しているはずだ。目一杯おめかしをしておいで」
「おめかし？」
「ああ。おとぎ話には「舞踏会」があるだろう？それを今夜開くんだ」
「本当？すごい！素敵だわ！！」
「喜ぶのはまだ早い。さあプリンセス、お支度を」
そう言って部屋の前で跪くと、手の甲に一つ、キスをくれる。
私の顔は瞬間的に沸騰した。
プ、プリンセス！？
心底楽しげな笑みを浮かべるラピスさんは、さしずめイタズラが大成功した子供みたいな目をしてる。
最近彼はこうやって私をからかうのが好きらしい。
いい加減慣れればいいんだろうけど、生まれてからずっとこんな上流階級な暮らしとは縁がなかったから、一ヶ月くらいじゃ変われない。
元々王子様のラピスさんにとって、さっきみたいなキスは当たり前の挨拶なんだろうけど、何だかちょっとズルイ。

ドキドキしちゃうのはいつも私なんだもの。
彼はいつだって余裕な顔して飄々と振舞うんだから。
きっと魔法をかけられる前から素敵な王子様だったに違いない。
そう思ったら、トクンと、鼓動が跳ねた。
マズイ、また顔が熱くなってきちゃった。
「それじゃあ王子様、また後ほど」
「ご機嫌よう」
クスリと笑って互いに視線を交える。
彼の後ろ姿を見送れば、やっぱりしっぽが大きく揺れていたのだった。

ダンスホールの天井には目が覚めるような青空に白い雲、小悪魔ちゃんたちが戯れている天井画。
特大サイズの5段シャンデリアがキラキラ輝いて、壁に掛けられた小さな照明用のシャンデリアも眩しいくらい煌めいている。
壁際にはピアノやヴィオラ、ヴァイオリンにフルートといった楽器たちがスタンバイ済み。
磨き上げられた長テーブルの上には豪奢な燭台の炎がゆったりと揺れていた。
ホールにつながる大階段の踊り場へたどり着くと、ベロア生地で作られた深緑色のジャケットを颯爽と着こなしたラピスさんが待っていて、すっと肘を構えてくれた。
促されるようにしてそこに軽く腕を絡めると、ふわりと揺れるレモン色のベルラインドレスとハイヒールで心もとない歩き方をした私を気遣うように、彼は歩調を緩めて階段を下りていく。
半日ぶりに再会したラピスさんは普段より一層凛として、重厚なオーラが全身を覆っていた。

まるで本当に王宮の舞踏会に来たみたいな気分になる。
自然と背筋が伸びて、いつもより胸を張れる。
くるくると内巻きにして、後頭部を高く結い上げた髪はシシリエンヌの力作だ。
耳たぶで揺れるイヤリングは大きな雫型のパールで、胸元にはルビーをあしらいダイヤモンドを散りばめた高価なネックレス。
せめてこの姿に相応しい心持ちでいよう。
そう決めて彼と歩き出せば、目の前には完全なる夢の世界が広がる。
フロアに降りるとヴィスコンティが椅子を引いてくれた。
私とラピスさんが席に着くとすぐに演奏が始まって、ホール中の証明が曲に合わせて揺れる。
用意されたフルコースは鮮やかにお皿を彩り、目まで楽しませてくれる。
ふと彼を見れば、優しく視線が重なった。
「踊ろうか」
「はい」
彼に手を引かれて立ち上がり、フロアの中央まで行く。
背中に添えられた手を感じると、初めてのことにちょっとだけ緊張して力が入る。
強ばりに気付いたラピスさんは柔らかく微笑んで
「力を抜いてごらん。大丈夫、私に任せて」
そう言った。
うん、大丈夫。
彼に言われるとどうしてすんなり信じられるんだろう。
言われた通り力を抜いて導かれるままの姿勢を取り、ラピスさんを見上げる。
その先に澄んだ碧い瞳。
見つめていると吸い込まれそう。
でも逸らすことも出来ないくらい魅せられている。

そうしているうちに彼の優しい吐息が聞こえた。
「今夜のリリーは今までで一番美しい。そんなに見つめられたら私が緊張してしまうよ」
「…ラピスさんたら」
「君のファーストダンスの相手になれるとは…とても光栄だ。さあ、曲に合わせて右足を引いて」
「はい」
まるで夢見心地。
促されるように足を引けば、そこから滑らかなステップが続いていく。
踊ることを気持ちよく感じるくらい、スムーズで優雅で、柔らかな誘導。
歩幅は全然違うはずなのに、そんなこと気にならないくらい上手にリードされる。
どんなにくるりと舞続けてもすぐ近くに彼の瞳があって、何故だかわからないけど一瞬たりとも逸らすことなんてできなかった。
丁寧に梳かれた黄金色のたて髪が揺れる。
そして彼の姿に肖像画の彼が重なって見えた。
ああこの人はこんなにも優しいのに、どうして獣の姿にされてしまったの？
こんな姿になっても変わらず人を想う気持ちを持ち続けて、温かな思いに溢れているのに。
「人食い野獣」と罵られても手を差し伸べる優しさに満ちた人なのに。
どうしたら元に戻せるの？
あなたにかけられた魔法はどうすれば解ける？
私に出来ることは何？
そう、思った時だった。
「きゃ」
コツンと踵が床に触れた瞬間、僅かに滑ってバランスが崩れる。

はずみでポスン、と温かな胸に抱きとめられた。
そのままぐっと抱きしめられる。
胸が、痛い。
おずおずと大きな背に腕を回せば、彼の腕は更に力を込めて私を抱き込む。
それが酷く切なくて、喉が詰まる。
「リリー…」
苦しげに呼ばれれば、もしかして彼も同じ思いなのかもしれない、なんて思ってしまう。
徐々に速度を上げる鼓動と、体中をめぐる熱が痛いくらい呼吸を奪っていく。
ラピスさん。
縋るように頬を押し付ける。
彼の大きな獣の手が穏やかに私の髪を撫でてくれる。
それがすごく嬉しくて、心臓が一際大きな音を立てた。
ようやく顔を上げれば再び互いの視線が重なって、次第に近づく距離に視界はもうぼやけていた。
ちゅ、と音を立てて柔らかな唇が額に触れる。
「おいでリリー。少し風に当たろう」
気付けば彼の手も確かな熱を孕んでいた。

続く

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7174z/

---

My Sweet Beast

2011年12月31日23時46分発行